

日本の火山活動概況（2011年1月～2月）

気象庁



図 1. 2011年1月～2月に目立った活動があった火山

浅間山 (36°24'23"N, 138°31'23"E)

山頂火口からの噴煙量に大きな変化はなく、噴煙高度は火口縁上100～300mで経過した。

1月5日に火山性地震がやや増加したが、それ以外はやや少ない状態で経過した。火山性微動は少ない状態で経過した。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中2回実施)では、一日あたり200～300トンとやや少ない状態であった。

山体周辺のGPS連続観測では、2008年7月初め頃から2009年夏にかけて深部へのマグマの注入を示す伸びがみられ、その後2009年秋頃からわずかに縮みの傾向がみられている。

伊豆大島 (34°43'29"N, 139°23'41"E)

2月9日未明から夕方にかけて、島西部を震源とする火山性地震が一時的に増加した。10日00時32分には島西部を震源とするマグニチュード2.2の地震が発生し、

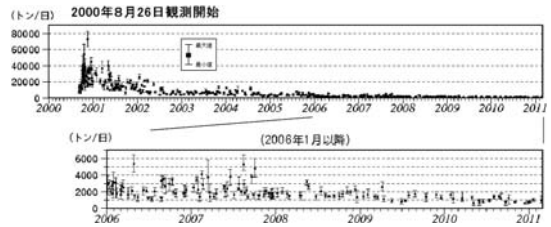


図 2. 三宅島 火山ガス(二酸化硫黄)放出量の変化(2000年8月26日～2011年2月28日)

伊豆大島町元町で震度1を観測した。それ以外は火山性地震の発生回数は少なく、震源は、主に島西部と三原山周辺の浅いところに分布した。

GPS及び体積ひずみ計による観測では、2010年5月下旬から伸びの傾向がみられたが、9月頃から体積ひずみ計の伸びの傾向が鈍化し、2011年1月から、伸びはほぼ停滞している。また、GPSによる連続観測では、地下深部へのマグマ注入によると考えられる島全体の長期的な膨張傾向が継続している。

1月21日及び2月26日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内及びその周辺に引き続き弱い噴気が認められた。三原山山頂火口内の中央火口の温度や地表面温度分布は前回(2010年12月16日)の観測と比べて特段の変化はなかった。

三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

噴煙高度は火口縁上概ね100～600mで経過した。

島内で実施した、COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中3回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり800～1,000トンと、多量の火山ガス放出が続いている。また、三宅村の火山ガス濃度観測によると、山麓で時々高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

山頂火口直下を震源とする火山性地震は、少ない状態が続いている。

全磁力観測では、火山活動とみられる有意な変化は観測されなかった。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮を示す地殻変動が継続している。

硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E (摺鉢山))

1月29日及び30日に海上自衛隊の協力により実施した現地調査では、島西部の阿蘇台陥没孔^{あそだいかんぼつこう}では、前回

(2010年7月29日)の観測時と比べて、孔内の水位の上昇を確認した。水位の上昇量はおよそ3mから5m程度と推測され、赤外線熱映像装置による孔底の観測では、泥水の温度は約100℃であった。また、前回同様に、間欠的な熱水の噴出が確認された。孔内から泥水の噴出に伴って立ち上る噴気の高さは、孔の上端から最大約20mであった。なお、金剛岩、硫黄ヶ丘及び摺鉢山では噴気の状態及び地熱等の状況に特段の変化は認められなかった。

2月8日に海上保安庁が実施した上空からの観測によると、滑走路東端の北側や島西部の阿蘇台陥没孔等で噴気が観測された。

2月16日に海上自衛隊の協力により実施した現地調査では、滑走路東端の北側に位置する東山で噴気が確認された。赤外線熱映像装置で観測した表面の最高温度は70℃程度であったが、サーミスタ温度計で観測した表層地中内部の最高温度は100℃であった。この場所では、2010年2月12日に海上自衛隊の協力により実施した上空からの観測でも噴気が確認されている。

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、2010年8月頃から地震活動は比較的活発で、2011年2月以降さらに増加傾向にある。

国土地理院の観測によると、2006年8月に始まった島全体の隆起を示す地殻変動は、2010年11月中旬頃から一旦鈍化したが、2011年1月末頃から隆起速度が増加している。また、島の南部で南北に大きく伸びる変動がみられる。

福德岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

1月19日に第三管区海上保安本部が実施した上空からの観測によると、火山活動による複数の湧出点からと思われる青白色、乳白色、うぐいす色の変色水が、北東方向側に半径約500メートルの扇形状に広がっているのが確認された。

1月24日に海上自衛隊が実施した上空からの観測によると、福德岡ノ場付近の海面に火山活動による変色水が確認された。

1月28日に海上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、福德岡ノ場付近の海域で火山活動によるとみられる白濁、薄茶色の変色水を確認したが、浮遊物は確認されなかった。

2月8日に海上保安庁が実施した上空からの観測によると、火山活動による複数の湧出点付近から濃乳白色、青色、青白色、緑色の変色水が幅約50m、長さ約1000mで北東方へ帯状に延びているのが確認された。

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上



図 3. 霧島山（新燃岳）噴火の状況
(猪子石遠望カメラ：新燃岳の南西約7km)
1月26日14時49分頃から本格的なマグマ噴火が始まった。



図 4. 霧島山（新燃岳）火口内の溶岩の状況
1月31日に火口内に蓄積された溶岩は直径500m程度で、頂部は火口縁付近まで達していた。

自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福德岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

霧島山（新燃岳）(31°54'34"N, 131°53'11"E (新燃岳)) 【噴煙等表面現象の状況】

新燃岳では、1月19日01時27分にマグマ水蒸気爆発と思われる小規模な噴火が発生した。天候不良のため噴煙の状況は不明だったが、新燃岳から南東方向の宮崎県都城市や日南市で降灰が確認された。1月22日07時30分にもごく小規模な噴火が発生した。

1月26日には、07時31分にごく小規模な噴火が発生した後、14時49分頃から本格的なマグマ噴火が始まった。18時50分には灰白色の噴煙が火口縁上2,000mに達し、多量の火山灰等を噴出した。噴煙は南東方向に流

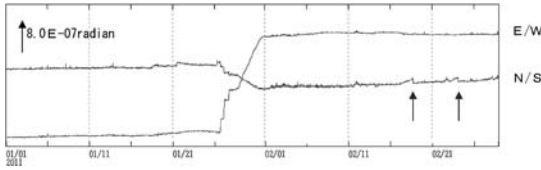


図 5. 霧島山(新燃岳) 高千穂河原傾斜計の変化(2011年1月~2月)

高千穂河原傾斜計(新燃岳南東約3km)では、1月26日以降の噴火による噴出物の増加に伴う山体の沈降を示す変化が観測されていたが、2月2日以降停滞している。

矢印は噴火(爆発的噴火を含む)後に山体の収縮を示す変化が認められた傾斜変動を示している。噴火が発生した前後に、このような変化が認められる事例もあったが、傾斜変化を伴わずに噴火が発生する場合や、傾斜変動が認められても噴火が発生しない事例もある。

れ、広範囲で多量の降灰があった。夜間には、遠望カメラで新燃岳火口から高温の物質が噴出しているのを確認した。また、高感度カメラで火山雷が確認された。27日の現地調査では、鹿児島県霧島市高千穂河原(新燃岳火口から南東約3km)で直径7~8cm、宮崎県都城市御池町(新燃岳火口から南東約7km)で直径4~6cmの小さな噴石が降下しているのを確認した。

1月27日15時41分、中規模の爆発的噴火が発生した。爆発的噴火は1959年以来、52年ぶりであった。以後、爆発的噴火が繰り返されている。

1月28日午前、東京大学地震研究所が実施した上空からの観測で火口内に直径数10mの溶岩の噴出が確認された。また、火口の南西側に小規模な火砕流が500~600m程度流下した跡が確認された。同日12時47分の爆発的噴火により噴石が火口から南西約1.3kmに飛散したのを確認した。

1月30日、気象研究所と防災科学技術研究所が行った、だいち衛星画像(JAXA提供)の解析により、火口内に蓄積された溶岩が、直径500m程度の大きさに成長していることが判明した。

1月31日に実施した上空からの調査では、火口内に蓄積された溶岩は直径500m程度の大きさで、頂部は火口縁と同等の高さに達していた。また、赤外熱映像装置による観測では溶岩の中心が非常に高温であることを確認した。

2月1日07時54分に中規模の爆発的噴火が発生した。現地調査で、新燃岳火口から南西3.2km付近で長径70cm短径50cmの大きな噴石の飛散を確認した。同日午前実施した上空からの調査で、火口内に蓄積された

溶岩は直径500m程度で、1月31日と大きな変化はなかったが、溶岩の頂部の一部がわずかに低くなっていたのを確認した。

2月2~5日にかけて実施した上空からの調査では、蓄積された溶岩は直径600m程度に拡大し、表面は平坦となっていた。

2月7日に実施した上空からの調査では、蓄積された溶岩中央部にわずかな窪みを確認した。また、赤外熱映像装置による観測では、高温の領域が小さくなり溶岩の表面温度が低下していた。

2月9日に実施した上空からの調査では、溶岩の一部が褐色となっており、火山灰の堆積により溶岩と火口壁の境界が不明瞭となっていた。

ほぼ連続的に火山灰を放出していた噴火は、2月9日頃から断続的となり、その後は、時々爆発的噴火を含む小規模な噴火が発生しているが、噴火の頻度は低くなっている。

2月14日05時07分の爆発的噴火では、上空の強い風の影響により新燃岳の北東方向の宮崎県小林市周辺(火口から約16km)で直径1.5~5cmの小さな噴石が降下し、車のサンルーフ等が破損する被害があった。

2月25日に実施した上空からの調査では、溶岩の表面には南北に走る亀裂が認められた。

この間、1月26日に火口から約20km離れた鹿児島空港から夜間に肉眼で火映が確認された。また、高感度カメラで火映が1月26日から2月10日までと2月28日に観測された。

(以上の上空からの調査は、鹿児島県、九州地方整備局、海上自衛隊第72航空隊鹿屋航空分遣隊及び陸上自衛隊西部方面ヘリコプター隊第1飛行隊の協力を得て実施)

【地震や微動、空振の状況】

火山性地震は、増減を繰り返しつつやや多い状態が続いていたが、マグマ噴火が始まってからの1月28日から2月上旬にかけやや周期の長い火山性地震が発生し、日回数が最多で808回(1月30日)と増加した。その後は増減を繰り返しながら多い状態で経過した。また、噴火(爆発的噴火を含む)の前後には火山性地震が頻発することがあり、月回数は1月:2,037回、2月:2,506回であった。震源はこれまでと同様に、主に新燃岳付近のごく浅い所から深さ約4kmに分布した。

1月18日に振幅が小さく、継続時間の短い火山性微動を2回観測した。19日の噴火に伴う火山性微動は01時26分に発生し03時02分まで続いた。26日07時17分から発生した火山性微動は、同日14時49分頃の本格的

なマグマ噴火開始とともに振幅が大きくなり、最大振幅は新燃岳南西（新燃岳より南西約 1.7 km）の観測点で 819 $\mu\text{m/s}$ であった。同日 18 時 35 分頃には振幅がやや小さくなり 40 $\mu\text{m/s}$ 程度となったが、その後消長を繰り返しながら 2 月 7 日まで継続した。その後、微動の発生は断続的となっていたが、2 月 28 日 07 時 32 分から 3 月 4 日 14 時 15 分まで振幅の小さな火山性微動が継続した。

火山性微動の月回数は 1 月：49 回、2 月 130 回で継続時間は月合計で 1 月：229 時間 39 分、2 月 182 時間 14 分であった。また、1 月 30 日から調和的な微動を観測しており、2 月 8 日まで時々発生した（1 月：33 回、2 月：23 回）。

1 月 26 日からの本格的なマグマ噴火や爆発的な噴火に伴い、九州の広い範囲で空振が観測された。また、2 月 1 日 07 時 54 分の爆発的噴火では、湯の野（新燃岳より南西約 3 km）の観測点で 458 パスカルの空振を観測し、鹿児島県霧島市等で窓ガラスが破損するなどの被害が発生した。

【地殻変動の状況】

GPS 連続観測では、新床－新燃岳北東の基線で 2010 年 9 月頃から伸びの傾向がみられていたが、1 月 26 日以降の噴火による噴出物の増加に伴う縮み傾向に転じた。2 月以降は、再び伸びの傾向が観測されている。

傾斜計で 1 月 26 日以降の噴火による噴出物の増加に伴う山体の沈降を示す変化が観測されていたが、溶岩の成長がほぼとどまった 2 月 2 日以降は停滞している。

また、傾斜計で噴火（爆発的噴火を含む）後に山体の沈降を示す変化が認められる事例があったが、傾斜変化を伴わずに噴火が発生する場合、傾斜変動が認められなくても噴火が発生しない事例もあった。

【火山ガスの状況】

1 月 27 日、1 月 30 日に実施した現地調査では、二酸化硫黄の平均放出量は一日あたりそれぞれ、12,000 トン、11,000 トンであったが、2 月 25 日に実施した現地調査では、600 トンと減少していた。

桜島（31°34'38"N, 130°39'32"E（南岳））

昭和火口では、爆発的噴火を含む噴火が 1 月中旬から増加し、活発な状態で経過した。

1 月は噴火が 102 回（そのうち爆発的噴火は 88 回）、2 月は噴火が 142 回（そのうち爆発的噴火は 108 回）発生した。これらの噴火に伴い、最も遠くまで飛散した大きな噴石は 4 合目（昭和火口から 800 m～1,300 m）まで達した。2 月 19 日 19 時 08 分の爆発的噴火に伴って火砕流

が火口から南東へ約 500 m 流下した。

南岳山頂火口では、2 月 7 日の 08 時 05 分と 09 時 16 分に爆発的噴火が発生し、大きな噴石が 8 合目（南岳山頂火口から 500 m～700 m）まで達した。南岳山頂火口での噴火は、2009 年 10 月 3 日以来である。

1 月 14 日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、南岳山頂火口の火口部が埋まっているのが確認された。また、同火口および昭和火口内に白色の噴煙が確認された。

COMPUSS を用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中 3 回実施）では、二酸化硫黄放出量は、1 月 7 日、1 月 13 日は一日あたり 800～1,700 トンとやや多い状態であったが、2 月 9 日は一日あたり 300 トンと少ない状態であった。

GPS 連続観測では、桜島島内で火山活動に起因する特段の変化はなかった。有村観測坑道の水筒傾斜計（大隅河川国道事務所設置）では、2010 年 7 月頃からみられた山体の沈降傾向は 2010 年 11 月下旬以降停滞していたが、2 月上旬から再び火山灰の放出量が多くなり沈降傾向となっている。また、国土地理院の GPS による地殻変動観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）深部の膨張による長期的な伸びの傾向がみられる。

鹿児島県の降灰量観測データをもとに解析した降灰量は、2010 年 12 月は 31 万トン、2011 年 1 月は 36 万トンであった。

薩摩硫黄島（30°47'35"N, 130°18'19"E（硫黄岳））

硫黄岳山頂火口の噴煙活動はやや高い状態で経過した。また、同火口では夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映を時々観測した。

火山性地震は少ない状態で経過した。2 月 1 日に振幅が小さく継続時間の短い火山性微動を 1 回観測した。火山性微動の観測は 2010 年 2 月以来である。

1 月 14 日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、前回（2010 年 10 月 22 日）と比べて硫黄岳山頂火口及びその周辺の状況に特段の変化はなかった。

諏訪之瀬島（29°38'18"N, 129°42'50"E（御岳））

御岳火口では爆発的噴火が 1 月に 26 回、2 月に 15 回発生し、噴火活動は活発に経過した。

火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。2 月 3 日 22 時 06 分に諏訪之瀬島周辺を震源とするマグニチュード 2.9 の地震が発生し、十島村諏訪之瀬島で震度 3 を観測した。そのほか 2 月に震度 1 以上を観測した地震が 17 回発生したが、地震発生前後で表面現象に変化は認められなかった。

1月14日に、第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、御岳火口及びその周辺の状況に特段の変化は認められなかった。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責: 気象庁地震火山部火山課 岡垣晶子)

日本の火山活動概況 (2011年3月~4月)

気象庁



図 1. 2011年3月~4月に目立った活動があった火山

吾妻山 (37°44'07" N, 140°14'40" E)

大穴火口の噴気は、50~300mで経過し、噴気活動はやや高い状態が続いている。

期間中大穴火口では、度々、夜間に高感度カメラで明るく見える現象を観測した。この現象を観測した前後で火山性地震の増加はなく、噴煙の状況や空振計及び地殻変動データにも変化はなかった。この現象は硫黄の燃焼による発光と考えられる。大穴火口が明るく見える現象は、2010年5月にも観測している。

4月22日に実施した現地調査では、前回(2010年10月13日)と比較して、大穴火口及び八幡焼付近の地表温度分布に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は3月は少ない状況であったが、4月はやや多い状況で経過した。

浅間山 (36°24'23" N, 138°31'23" E)

3月12日以降、山頂火口の南及び南東(仏岩付近の直下)で火山性地震がややまとまって発生したが、いずれも規模の小さなものであった。4月19日07時08分頃、浅間山南東部の浅い所(仏岩付近の直下)を震源とするマグニチュード1.7の地震により、長野県軽井沢町追分で震度1を観測した。この地震の前後で一時的に地震がやや増加したが、その他の期間は、火山性地震はやや少ない状態で経過した。それらの多くは、これまで同様、山頂火口直下のごく浅い所で発生したと推定される。なお、浅間山周辺で発生した地震により震度1以上を観測したのは、1994年11月24日に浅間山直下で発生したマグニチュード2.3の地震により、長野県軽井沢町追分で震度1を観測して以来である。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中3回実施)では、一日あたり100~200トンとやや少ない状態であった。

山頂火口からの噴煙量に大きな変化はなく、噴煙高度は火口縁上100~300mで経過した。

山体周辺のGPS連続観測では、2008年7月初め頃から2009年夏にかけて深部へのマグマの注入を示す伸びがみられ、その後2009年秋頃からわずかに縮みの傾向がみられている。

焼岳 (36°13'37" N, 137°35'13" E)

2011年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」以降、同日14時57分のマグニチュード4.7の地震をはじめ、山頂直下~北西麓の浅い所での地震活動が活発化し、有感地震も多発したが、その後地震活動は次第に低下した。3月21日13時15分のマグニチュード4.8の地震以降、再び地震活動が活発化したが、その後地震活動は低下しながら継続している。4月3日01時52分に北麓を震源とするマグニチュード2.4の地震が発生し、岐阜県高山市で震度1を観測した。

火山性微動の発生等、直接噴火活動に関連するような変化は認められておらず、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

富士山 (35°21'39"N, 138°43'39"E)

3月15日22時31分に山頂の南南西約5km、深さ14kmを震源とする静岡県東部の地震(マグニチュード6.4)が発生し、静岡県富士宮市で最大震度6強を観測した。以降、その震源から山頂直下付近にかけて地震が増加した。その後、余震活動は低下しながら継続している。

火山性微動や浅部の低周波地震は観測されていない。また、その他の観測データで浅部の異常を示すものはなく、噴火の兆候は認められない。

箱根山 (35°14'00"N, 139°01'15"E)

2011年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」以降、駒ヶ岳から芦ノ湖付近と金時山付近を震源とする地震活動が活発化した。地震活動は3月14日以降低下したが、3月20日に箱根山付近で一時的に増加した。また、3月31日に大涌谷の北で小規模な活動があった。3月21日23時14分には神奈川県西部(駒ヶ岳付近)を震源とするマグニチュード4.2の地震が発生し、神奈川県箱根町などで震度2を観測した。3月には、その他にも震度2から震度1を観測する地震が発生したが、4月中旬以降地震活動は収まっている。

気象庁が設置している体積ひずみ計や神奈川県温泉地学研究所の傾斜計等による地殻変動観測では、今回の地震活動に関連した変化はなかった。

火山性微動の発生等、直接噴火活動に関連するような変化は認められておらず、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

噴煙高度は火口縁上100~500mで経過した。

島内で実施した、COMPASSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中3回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり600~1,100トンと、多量の火山ガス放出が続いている。また、三宅村の火山ガス濃度観測によると、山麓で時々高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

山頂火口直下を震源とする火山性地震は、少ない状態が続いている。

全磁力観測では、火山活動とみられる有意な変化は観測されなかった。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮を示す地殻変動が継続している。

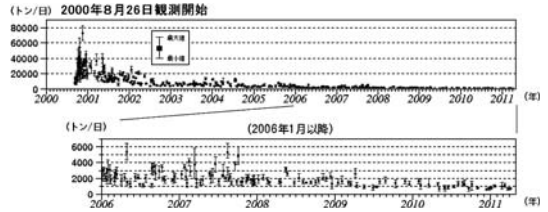


図2. 三宅島 火山ガス(二酸化硫黄)放出量の変化(2000年8月26日~2011年4月30日)

硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E (摺鉢山))

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、2011年2月末頃から地震活動は高い状態にある。

国土地理院の観測によると、2006年8月に始まった島全体の隆起を示す地殻変動は、2010年11月中旬頃から12月にかけて一時鈍化したが、2011年1月末頃から隆起速度が増加している。また、島の南部で大きな南向きの変動がみられる。

福徳岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

4月12日に海上自衛隊が実施した上空からの観測によると、福徳岡ノ場付近の半径約100mの海域において、火山活動による湧出点付近から乳白色の変色水が確認された。

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福徳岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

霧島山(新燃岳) (31°54'34"N, 131°53'11"E (新燃岳))
【噴煙等表面現象の状況】

新燃岳では、3月に爆発的噴火を含む噴火が間欠的に7回発生したが、噴火の規模や頻度は2月上旬までの最盛期に比べて低下した状態になった。4月には噴火が3回発生したが、爆発的噴火の発生はなかった。

3月1日19時23分に爆発的噴火が発生したが、噴煙等の状況は天候不良のため確認できなかった。これ以降、爆発的噴火は発生していない。

3月13日17時45分に噴火が発生し、灰白色の噴煙が火口縁上4,000mまで上がり、南東に流れた。この噴火による火砕流及び弾道を描いて飛散する大きな噴石は、観測されなかった。

新燃岳火口では、3月1日から14日にかけて夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映が時々観測された。

4月3日08時41分の噴火では、灰白色の噴煙が火口

縁上 3,000 m まで上がり、東に流れた。この噴火により、新燃岳火口から約 600 m の範囲に大きな噴石が飛散するのを確認した。

4 月 18 日 19 時 22 分の噴火では、灰白色の噴煙が火口縁上 2,000 m まで上がり、南東に流れた。この噴火により、新燃岳火口の西から北側の約 1 km の範囲に大きな噴石が飛散するのを確認した。これらの噴火による火砕流は観測されなかった。

【噴火に伴う降灰等の状況】

3 月 1 日 19 時 23 分の爆発的噴火では、新燃岳から東方向の都城市の一部の地域で少量の降灰が確認された。

3 月 3 日 18 時 08 分の噴火では、降灰の範囲は新燃岳の南東方向へ分布しており、宮崎県の都城市、日南市、宮崎市の一部で確認した。

3 月 13 日 17 時 45 分の噴火では、降灰の範囲は主に新燃岳火口から南東方向に分布し、日向灘にまで達していた。また、14 日に行った現地調査では、直径 1~4 cm の小さな噴石（火山れき）が、新燃岳火口から南東方向約 9 km の都城市夏尾町まで降下しているのを確認した。

4 月 3 日 08 時 41 分の噴火では、降灰は新燃岳から東方向に分布し日向灘まで達した。

4 月 9 日 01 時 06 分の噴火では、降灰は主に新燃岳火口から東北東方向に分布し、宮崎県新富町付近（新燃岳火口から 60 km 付近）まで達した。

4 月 18 日 19 時 22 分の噴火では、降灰は新燃岳の東方向に分布し日向灘まで達した。小さな噴石（火山れき）は風に流されて約 9 km まで達した。宮崎県の高原町（新燃岳火口の東側約 9 km の地点）で最大 2 cm の小さな噴石（火山れき）が降下しており、民家の太陽熱温水器や太陽電池パネルが破損していた。

【地震や微動、空振の状況】

火山性地震は、増減を繰り返しながら多い状態で経過し、月回数は 3 月が 2, 262 回、4 月が 3, 840 回であった。噴火（爆発的噴火を含む）の前には火山性地震が頻発することがあった。3 月 17~18 日、4 月 24~25 日にかけても頻発したが、噴火は発生しなかった。2 月 28 日 07 時 33 分に発生した振幅の小さな火山性微動は、3 月 4 日 11 時 05 分まで継続した。その後も振幅の小さな火山性微動が時々発生し、火山性微動の継続時間の月合計は 3 月が 87 時間 38 分、4 月が 42 時間 13 分であった。

3 月 1 日 19 時 23 分の爆発的噴火では、湯之野（新燃岳より南西約 3 km）の観測点で 69.6 Pa の空振を観測した。

【上空からの新燃岳の状況】

九州地方整備局、航空自衛隊芦屋救難隊、航空自衛隊春日ヘリコプター空輸隊、海上自衛隊第 72 航空隊鹿屋

航空分遣隊、陸上自衛隊西部方面ヘリコプター隊第 3 飛行隊及び航空自衛隊新田原救難隊の協力を得て 3 月 2, 4, 7, 11, 22 日、4 月 26, 28 日に実施した上空からの調査では、火口内に蓄積された溶岩の大きさは直径 600 m 程度で、大きな変化はなかった。3 月 2, 4, 7, 11, 22 日の調査では、蓄積された溶岩東側の亀裂付近及び北西側の噴煙量が比較的多く、白色噴煙は主に溶岩東側の亀裂及び縁辺から 100~300 m 程度上がっていた。また、3 月 11 日の調査では、火口内南東側に直径 100 m 程度の火孔を確認した。この火孔の位置は、2 月上旬にも勢いよく噴煙を上げていた場所である。4 月 26 日及び 28 日には、蓄積された溶岩縁辺の北側及び東~南東側から、白色の噴煙が火口縁上 50 m~300 m 程度上がっていた。また、2 月 25 日及び 3 月 2 日に比べて、4 月 28 日は火口内の堆積物が増加していた。

赤外線映像装置による調査では蓄積された溶岩の中心部は徐々に表面温度が低下しているのを確認した。溶岩東側の亀裂付近及び溶岩北西側の噴煙量の多い部分が比較的高温であった。気象研究所と防災科学技術研究所が行った、だいち衛星画像（JAXA 提供）の解析では、その後大きな変化はなかった。

【火山ガスの状況】

COMPUSS を用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中 9 回実施）では、3 月 2 日には一日あたり 1,300 トンであったが、その後は 100~500 トンに減少した。

【地殻変動の状況】

国土地理院の GPS による地殻変動観測では、新燃岳の北西数 km の地下深くのマグマだまりへのマグマの供給が続いていることを示している。

高千穂河原傾斜計（新燃岳南東約 3 km）では、噴火（爆発的噴火を含む）の数時間~数日前に新燃岳側がわずかに隆起し、噴火に伴い沈降して元に戻る変化が時折見られたが、3 月 1 日のように傾斜変化を伴わずに噴火や爆発的噴火が発生する事例や、3 月 16~18 日、4 月 22 日のように傾斜変動が認められても噴火が発生しない事例もあった。これらの傾斜変動はマグマだまりから新燃岳へのマグマの上昇が断続的に続いていることを示すと推定される。

桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、爆発的噴火を含む噴火が 3 月は 72 回（そのうち爆発的噴火は 57 回）、4 月は 109 回（そのうち爆発的噴火は 92 回）と活発な状態で経過した。これらの噴火に伴い、最も遠くまで飛散した大きな噴石は 4 合目（昭和火口から 800 m~1,300 m）まで達した。また、4 月

4日16時47分の爆発的噴火では、噴煙が火口縁上3,000mまで上がった。4月30日22時42分の爆発的噴火では、火砕流が同火口の東へ約800m流下した。

南岳山頂火口では、噴火は発生しなかった。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中9回実施)では、一日あたり400~1,700トンとやや多い状態であった。

気象庁が桜島島内で行っているGPS連続観測では、火山活動に起因する特段の変化はなかった。有村観測坑道の水筒傾斜計(大隅河川国道事務所設置)では、2010年7月頃からみられた山体の沈降傾向は11月下旬以降停滞していたが、火山灰の放出量が多くなった2011年2月上旬から再び沈降傾向が続いている。また、国土地理院によるGPS連続観測では、始良カルデラ(鹿児島湾奥部)の膨張による長期的な伸びの傾向がみられる。

3月22日に海上自衛隊第72航空隊鹿屋航空分遣隊の協力を得て行った上空からの調査では、南岳山頂火口のA火口及びB火口及びその周辺から白色の噴煙が上がっていた。赤外線映像装置による観測では、A火口及びB火口の噴気孔に対応した高温部を確認した。

鹿児島県の降灰量観測データをもとに解析した降灰量は、2011年2月は58万トン、2011年3月は33万トンであった。

薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動はやや高い状態で経過した。また、同火口では夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映を時々観測した。

火山性地震は、少ない状態で経過した。

振幅が小さく継続時間の短い火山性微動を3月に1回観測した。

諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

御岳火口では、爆発的噴火を含む噴火が時々発生し、活発な噴火活動が続いている。

3月19日12時53分の爆発的噴火では、住民から十島村役場諏訪瀬島出張所へ、噴石が火口周辺に飛散したとの通報があった。遠望カメラによる観測では、天候不良のため噴煙や噴石は確認できなかった。

2011年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」以降、A型地震が一時的に増加したが、その後減少し、地震活動は収まっている。火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責：気象庁地震火山部火山課 岡垣晶子)

○人事公募

【学校法人明治大学 黒耀石研究センター】

特別嘱託職員募集

1. 募集人員 1名
2. 勤務地 明治大学黒耀石研究センター
住 所 長野県小県郡長和町大門 3670-8
3. 募集条件
 - (1) 地球化学・地質科学を専門とする大学院博士後期課程修了者で博士の学位を有する者、またはそれに準ずる能力を有する者。
 - (2) 以下の業務内容を円滑に遂行できること。
 - (3) 普通免許取得者。勤務地への通勤には自動車が必要ですが、ただし、大学から自動車の貸与等はありません。
4. 業務内容
 - (1) 蛍光X線分析装置などの理化学的分析機器を使用した黒耀石製遺物の産地分析全般に関する業務(試料取扱い・機器操作・データ解析・報告書作成など)。
 - (2) センターが推進する研究プロジェクト等の支援(データ整理、出土品分析、事務局業務など)。
 - (3) 施設の維持・管理(受贈等図書管理・来館者等の対応など)。
 - (4) 社会連携事業の支援(市民講座出講など)。
5. 契約期間

2011年4月1日~2012年3月31日(契約を更新する場合あり)

契約開始日(勤務開始日)は、採用者と相談の上決定します。
6. 勤務時間帯

月~金曜日 9時00分~17時00分(休憩時間1時間含)
7. 待遇
 - (1) 給 与 月額220,000円
 - (2) 賞 与 6月, 12月に各220,000円(前年度実績)
 - (3) 通勤手当 月額28,000円を限度として本学規程に基づき支給
 - (4) 住宅手当 月額23,500円を限度として本学規程に基づき支給
 - (5) 休 日
 - ① 日曜日及び国の定める休日
 - ② 創立記念日(11月1日)および創立記念祝日(1

月 17 日)

③ 年末年始 (12 月 26 日～1 月 7 日)

(6) 休 暇

① 夏期休暇 本学一斉休暇 5 日間

② 勤務日以外の曜日 (休日を除く)

③ 有給休暇は労基法のとおり (半年以上勤務された場合)

(7) 各種保険 社会・雇用保険完備

(8) 赴任旅費 本学専任教職員旅費規定に基づき、交通費及び荷物運送料 (上限 30 万円) を支給

8. 選考方法

提出書類の審査および面接の結果をもとに選考します。

9. 提出書類および提出先

(1) 履歴書 (書式自由. 連絡可能な電話番号, Email アドレスを明記してください.)

(2) 業績一覧 (最近 5 年程度の業績を一覧にして提出してください.)

著者名, 発行年, タイトル, 掲載誌名を明記してください.

雑誌等に掲載が決定している印刷中の業績には「印刷中」と記してください.

なお, 業績の原本あるいは写しを提出する必要はありません.)

(3) 提出先

厳封の上, 下記の宛先まで郵送してください.

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

学校法人明治大学 研究推進部 研究知財事務室

「黒耀石研究センター特別嘱託職員採用係」宛

(4) 応募・選考に係るお問い合わせ先

学校法人明治大学総務部人事課 TEL 03-3296-4069

10. 応募期間

2011 年 3 月 7 日 (月)～3 月 14 日 (月) (必着)

11. 面接 (書類選考通過者のみ)

2011 年 3 月 18 日 (金) (面接会場: 駿河台キャンパス)

書類選考の結果は, 合否に関わらず, 電話, Email, 郵送のいずれかの方法でご連絡いたします。【通知予定日 3 月 16 日 (水)】書類選考通過者には, 面接時間の連絡をします。

12. 個人情報の取り扱いについて

応募書類は採用活動のみに利用し, 終了後は当校で適切に処理します。

また, 採用者の応募書類は, 採用後の雇用管理を目的として当校で保管します。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 3 月 10

日送信しました)

【東京大学地震研究所】

特任研究員 (特定短時間勤務有期雇用教職員 (非常勤)) 募集

「火山現象の数値シミュレーション」分野

1. 募集人員 1 名

2. 応募資格: 着任時に博士の学位を有する者.

3. 採用予定時期: できるだけ早い時期

4. 任期・再任: 任期は着任日から 2012 年 3 月 31 日まで. 再任については下記「問い合わせ先」に問い合わせること.

5. 待遇: 東京大学特定短時間勤務有期雇用教職員の就業に関する規程の定めるところによる. 勤務時間は週 35 時間.

6. 選考方法: 原則として書類選考. ただし面接を行うこともある.

7. 提出書類: 履歴書 (市販用紙可, 東京大学統一様式 http://www/u-tokyo.ac.jp/per01/r01_j.html も可)

研究業績リスト (査読の有無を分類)

主要論文の別刷り 3 編程度 (学位論文は要旨のみ).

コピーも可

研究歴 (A4 用紙 2 枚以内)

採用後の研究計画 (A4 用紙 2 枚以内)

応募者について意見をうかがえる方 1～2 名の氏名および連絡先

8. 応募締切 4 月 18 日 (月) 必着

9. 提出書類送付先:

〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学地震研究所庶務チーム (人事)

電話 03-5841-5668

注意: 封筒表に「特任研究員 (火山計算) 応募書類在中」と朱書きの上, 書留にて郵送のこと

10. 問い合わせ先:

東京大学地震研究所 数理系研究部門 小屋口剛博

電子メール: tak@eri.u-tokyo.ac.jp

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 3 月 23 日送信しました)

【京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設】

募集人員: 1 名

研究分野: 本施設の研究者と協力して, 施設が行っている研究分野あるいは, その関連分野における研究を進展させると共に, 地球熱学の新しい領域を開拓する意欲的な方を歓迎する。

現在, 本施設に所属している研究者やその研

究分野等の詳細については、HP等
(<http://www.vgs.kyoto-u.ac.jp>)を参照のこと。なお、応募にあたっては、本施設の教員と必ず事前に連絡を取り、研究計画について相談すること。適任者が見出せない場合は、施設長(kagiyama@aso.vgs.kyoto-u.ac.jp)と相談すること。

応募資格：着任の時点で、博士学位を有すること。

勤務地：地球熱学研究施設（大分県別府市）又は火山研究センター（熊本県阿蘇郡）

着任時期：平成23年10月1日以降の出来る限り早い時期。

採用予定期間：原則として採用日より2年間
(3年まで更新可)

- (1) 身分：研究員（研究機関）
- (2) 給与：月額約30万円
- (3) 週19時間勤務，交通費支給，有給休暇あり

応募期限：平成23年7月15日（金）

応募書類：

1. 履歴書 氏名，生年月日，住所，連絡先（電話およびe-mailも記載）
学歴 高校入学以降の入学年月日，卒業年月日
職歴
資格
賞罰 学会賞など
2. 業績目録 査読論文，査読なし論文，学会発表など
<博士号（題目，取得大学，時期も記載）>
3. 研究の概要および今後の研究の抱負（各A4，1枚程度）
4. 主要論文3編以内

応募方法：上記書類をPDFファイル（1，2，3は同一ファイル）で下記応募先に送付すること。

e-mail kagiyama@aso.vgs.kyoto-u.ac.jp

問い合わせ先：

〒869-1404 熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陽 5280
京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター 鍵山恒臣
電話 0967-67-0022（阿蘇）075-753-3938（京都分室）
e-mail kagiyama@aso.vgs.kyoto-u.ac.jp

（上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月30日送信しました）

○2011年度「信州フィールド科学賞」募集要項

【信州大学山岳科学総合研究所】

1. 募集対象

「信州フィールド科学賞」山岳地域におけるフィー

ルド・ワークを基本として研究している若手研究者（2011年度末で35才以下）を対象とします。研究対象や分野は問いません。

「信州フィールド科学奨励賞」

I種：陸域の自然・文化を対象にフィールド・ワークを行っている高校生を対象とします。

II種：「山」におけるフィールド・ワークに基づいてまとめられた大学の（過去3年間に提出された）卒業論文を対象とします。

2. 受賞

「信州フィールド科学賞」：受賞者は毎年度1名とします。

信州大学山岳科学総合研究所長名の賞状および副賞10万円を贈呈します。

「信州フィールド科学奨励賞」：受賞者は毎年度I種：1件，II種：1名とします。

それぞれに，信州大学山岳科学総合研究所長名の賞状および副賞5万円を贈呈します。

1. 2011年4月1日～6月30日

2. 応募方法

応募の書式は山岳科学総合研究所のWebサイト「<http://ims.shinshu-u.ac.jp/>」からダウンロードしてください。

- ・「信州フィールド科学賞」自薦を基本とし，応募の際に必要な書類は，山岳地域におけるフィールド・ワークの実績
- ・今後の展開と「山岳科学」での研究の位置づけなどを2000字程度（A4用紙で2枚以内）にまとめた調書，研究業績調書（口頭発表を含む）及び論文等の別刷です。
- ・「信州フィールド科学奨励賞」I種（高校生）：応募の際に必要な書類は，活動実績を示す調書，調査活動によって得られた成果をまとめたもの及び所属高校長の推薦書です。
- II種（卒業論文）：応募の際に必要な書類は，「山」におけるフィールド・ワークの実績と卒業論文の要旨を2000字程度（A4用紙で2枚以内）にまとめた調書，卒業論文のコピー及び指導教員による推薦書です。

6. 選考方法 応募者のなかから受賞候補者を選考委員会が選考し，山岳科学総合研究所運営委員会の議を経て，山岳科学総合研究所長が受賞者を決定します。

7. 授賞式

授賞式は2011年11月12日（土）に松本市で行い，受賞者の講演及び受賞者の研究分野に関連する内容のシンポジウムを併せて実施します。

8. 応募書類の送付先および問い合わせ先

応募書類は郵送または持参するとともに、電子ファイルとなっている調書等についてはメールへの添付書類でもお送り下さい。郵送の場合は、2011年6月30日必着でお願いします。

信州大学山岳科学総合研究所運営支援チーム

〒390-8621 松本市旭 3-1-1

電話：0263-37-2432 FAX：0263-37-2438

e-mail：suims@shinshu-u.ac.jp

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに4月13日送信しました)

○学生優秀発表賞募集(固体地球科学)のお知らせ

本年度(2011年度)より、日本地球惑星科学連合・固体地球科学を主たるセクションとして登録している学生(高校、大学、大学院の学生)を対象に、学生優秀発表賞の審査・授与を行うこととなりました。

下記の要項・手順でエントリーおよび審査を行います(事前にエントリーした発表のみ審査対象となります)。皆様、どうぞ奮ってお申し込み下さい。

詳細および応募方法は以下をご覧ください。

http://www.jpgu.org/whatsnew/sec_s_prize/index.html

締切りは5月2日(月)17:00JSTです。

審査基準は、必ずしも研究の結果のみを求めるものではなく、発表自体の質や完成度、皆さんの主体性などをバランスよく審査いたします(詳細は上記Web Siteをご覧ください)。「面白いことが分かった/分かりそうだ!」、「今回は頑張った!」、「良いデータが沢山でた!」など、皆さんの感動や頑張りをこの機会にぜひアピールしてください。

固体地球科学サイエンスセクションボード

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに4月21日送信しました)

○三井物産環境基金 募集のお知らせ

三井物産環境基金2011年度「東日本大震災復興助成」の対象は、「東日本大震災からの復興」をテーマに、震災によって派生した様々な環境問題を改善・解決し、持続可能な地域の再生を目指す復興活動及び研究を対象としています。地球環境に配慮した復興活動および研究に対し、総額6億円の助成を行うこととし、募集を開始いたしました。

【募集のお知らせ】

<http://www.mitsui.com/jp/ja/csr/contribution/fund/application/revival.html>

今回は、自己資金不要、できるだけ早く活動・研究を開始していただけるよう締め切りを3回に分けて順次選定、すでに着手している活動・研究があることを考慮し、2011年4月に遡って助成の対象とする等、条件の緩和や選定プロセスの効率化を図っております。

三井物産株式会社環境・社会貢献部

社有林・環境基金室三井物産環境基金事務局

Tel: 03-3285-3316

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月9日送信しました)

○ジョイデス号の航海 Exp. 340 “Lesser Antilles Volcanism & Landslide” 応募のお知らせ

ジョイデス号の航海, Exp. 340 “Lesser Antilles Volcanism & Landslide” を応募していますが、まだ数人の空きがありますのでお知らせします。ふるってご応募ください。

本航海で、日本からの共同主席は石塚 治さん(産総研)です。

航海予定期間: 2012年2月3日~3月18日

掘削海域 カリブ海東部

掘削船 (IO): JOIDES Resolution (USIO)

(科学目的)

本航海では、Lesser Antilles Arc の掘削により、火山弧の形成と崩壊のプロセスを解明する。第1の科学目的としては、(1)島弧火山の噴火活動史と、その島弧に沿う方向の時間空間変化の要因を明らかにすること、(2)海底での活動開始から現在にいたる島弧火山形成過程を復元すること、(3)島弧火山の崩壊により発生する、津波を引き起こす可能性のある海底土石流の引き金、運搬、堆積をコントロールするメカニズムを明らかにすること、そして(4)浸食、断片化および取り込みに関する堆積物と水の役割を評価し、リスクアセスメントへの言及を行うことです。

詳細は下記をご覧ください。

http://www.j-desc.org/modules/tinyd0/rewrite/expeditions/lesser_antilles.html

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月12日送信しました)

○ショートコースとサマースクールのお知らせ

※岡山大学・山下茂会員より以下のご連絡がありました。

Mineralogical Society of America Short Course “Sulfur in Magmas and Melts and Its Importance for Natural and Technical Processes”. August 21–23, 2011, Goslar, Germany.

Summer School “Sulfur in Melts”. Course 1, August 20, 2011 : The Volcanological Kitchen, Hannover University, Germany; Course 2, August 24, 2011 : The Engineering Menu, TU Clausthal, Germany.

Organizers : Harald Behrens (Hannover University), Joachim Deubener (TU Clausthal), Jim Webster (American Museum of Natural History)

サマースクールには、学生と若手研究者が対象の旅費サポートがあります(申し込み締め切り7月10日)。ショートコースとサマースクールの詳細、旅費サポートの詳細は、

<http://www.msasulfurmelts.org/> からご覧になれます。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月17日送信しました)

○平成 23 年度「みらい」航海の追加公募について

【海洋研究開発機構】

独立行政法人海洋研究開発機構では、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震とこれに伴う福島第 1 原発事故による海洋環境への影響を勘案し、弊機構が運航する海洋地球研究船「みらい」を用いた研究航海 (MR11-05) における放射能に関する観測研究課題の追加公募を行います。

募集期間は平成 23 年 5 月 18 日(水)~25 日(水)です。詳しくはウェブサイト (http://www.jamstec.go.jp/jamstec-j/maritec/2011_koubo/2011_mirai/) をご覧ください。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月18日送信しました)

○振興調整費「平成 23 年度霧島山新燃岳噴火に関する緊急調査研究」の WEB 公開のお知らせ

霧島山新燃岳が噴火したことから、振興調整費「平成 23 年度霧島山新燃岳噴火に関する緊急調査研究」(平成 23 年 2 月 21 日から平成 23 年 3 月 31 日) が実施されています。この研究内容を(独)防災科学技術研究所(研究代表者)のホームページで公開しております。ご関心をお持ちの方は下記をご覧ください。

<http://www.bosai.go.jp/volcano/kirishima>

内容は随時、更新してまいります。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに3月8日送信しました)

○件名 : J-DESC コアスクール—開催延期の御連絡

火山学会 関係者各位

今回の震災で被災された方々にお見舞い申し上げます。

震災復旧・震災対応等でご多忙中の方も多いとは思いますが、

ご多忙中恐縮ですが、下記、御連絡申し上げます。

3月22日より産総研で開催を予定しておりました「J-DESC コアスクール: 岩石コア記載技術コース」につきましては、今回の地震に係わる交通事情の悪化により、延期とさせていただきます。

参加申し込まれた皆様方には、ご迷惑おかけ致します。

また、ご連絡が遅くなり失礼致しました。お詫び申し上げます。

再開につきましては、後日改めて御連絡差し上げます。

以上、宜しくお願い申し上げます。

伊藤順一 itoh-j@aist.go.jp

地質調査総合センター

地質情報研究部門・長期変動グループ

〒305-8567 つくば市東 1-1-1 産総研 中央第 7

Tel. 029-861-3089 (直通 3833)

Fax. 029-861-3089

<http://staff.aist.go.jp/itoh-j/>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに3月18日送信しました)

○「海底地形の名称に関する検討会」開催のお知らせ

【海上保安庁】

1. 日時

「海底地形の名称に関する検討会」

平成 23 年 7 月 1 日(金)

2. 場所

海上保安庁海洋情報部会議室

(東京都中央区築地 5-3-1)

3. 主な議題

海洋調査機関などから提案された日本列島の海底地形名称の検討

4. 出席者

学識経験者(地理学、海洋底地球科学の各専門家)及び日本地理学会、関係機関(産業技術総合研究所、水産庁、東京大学大気海洋研究所、海洋研究開発機構、海上保安庁海洋情報部)の職員からなる 10 名の委員

5. 検討会の趣旨

海洋調査機関などの海底調査で明らかになった海底地形に学術的な名称を付与して、無用な混乱を防ぐことを目的としています。

海底地形の名称を決定する国内唯一の検討会です。

6 提案に関する問い合わせ先

提案地名がある場合は、以下の問い合わせ先にご連絡い

ただければ提案書を送付致します。

提案期限は随時とし、今回の検討会に間に合わない場合は次回検討会に提案いたします。

(問い合わせ先)

海上保安庁海洋情報部航海情報課 主任海図編集官
今井義隆

電話 03-3541-4201 FAX 03-3541-4388

<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KOKAI/ZUSHI3/topographic/topographic.htm>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに4月21日送信しました)

○第55回粘土科学討論会のお知らせ

【日本粘土学会】

■期 間：平成23年9月14日(水)～16日(金)

■会 場：鹿児島大学共通教育棟3号館

〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-35

■講 演

A. 一般講演：口頭発表，ポスター発表，提案型セッション

B. 特別講演：9月14日(水)13:00～14:00

講 演：大木公彦(鹿児島大学総合研究博物館教授)

題 目：鹿児島の地質：地球からのメッセージ(予定)

C. シンポジウム：9月14日(水)14:00～17:30

テーマ：土壌における資源・素材(予定)

講演申し込み等の詳細は、以下の日本粘度学会ホームページを参照下さい。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/cssj2/>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに4月27日送信しました)

○「第四紀研究」地学教育別冊号の刊行について

【日本第四紀学会】

日本第四紀学会では、学会誌「第四紀研究」の地学教育別冊号を刊行いたしました。

約200ページで、1冊1,000円で一般に販売しております。

その目次は以下のURLまたは文末のようになります。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/news3/special50-index.html>

購入につきましては

日本第四紀学会事務局へ直接連絡下さい(メール/FAXをお願いします)

〒169-0072 新宿区大久保2丁目4番地12号

新宿ラムダックスビル10階

日本第四紀学会事務局

E-mail: daiyonki@shunkosha.com

TEL: 03-5291-6231/Fax: 03-5291-2176.

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月18日送信しました)

○日本応用地質学会からのお知らせ

日本応用地質学会では、平成23年度のシンポジウムを下記の要領で開催いたします。

【題名】一般社団法人日本応用地質学会平成23年度シンポジウム

【シンポジウムテーマ】応用地質学の変遷と将来展望

【日時】平成23年6月17日(金)13:00～17:30

【会場】日本大学文理学部 百周年記念館国際会議場

【主催】一般社団法人日本応用地質学会

【費用(予定)】一般会員2,000円、学生会員500円(非会員は+500円)

【URL】http://wwwsoc.nii.ac.jp/jseg/00-main/H23_symposium.html

【問合せ先】一般社団法人日本応用地質学会事務局

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-3-14

お茶の水桜井ビル7F

Tel: 03-3259-8232, Fax: 03-3259-8233

E-mail: KYW04560@nifty.com

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月30日送信しました)

○日本の火山学の国際化に向けて

火山学会会員各位

AGU Fall Meeting などへのセッション提案の呼びかけ。

2013年に日本で IAVCEI 学術総会が開催されます。その成功のためには、日本の火山学の国際的な存在感を増すための努力が必要です。

よりよい研究成果を上げることはもちろんですが、成果を理解してもらうためには、各種国際会議等で成果をアピールする努力・経験が重要です。

日本人は、成果の割にこの点に改善の余地が大きいと言われております。

個々人がより良い発表のための努力をすることはもちろんですが、コンビナーとしてセッションを提案し、話題や議論の方向性を主導することも重要です。

そのために、各種国際学会でのセッション提案を行っていただくよう各会員にお願いいたします。

今年の AGU のセッション提案は2月25日～4月20日です。

<http://www.agu.org/meetings/>

会員の皆様の積極的な提案をお願いいたします。

尚、セッション提案はあくまで各個人の発意で行うべ

きもので、日本火山学会として調整や規制を行う意図はありません。

しかし、セッションが採択された場合には、学会のMLを通じてセッションへの投稿を呼びかけたいと思いますので、是非学会事務局にもご一報下さい。

会長 中田節也

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに2月23日送信しました)

○日本火山学会賞への推薦のお願い

火山学会会員各位

現在、平成23年度日本火山学会賞および日本火山学会研究奨励賞候補者を公募中です。

詳細は火山学会ホームページで案内していますが、公募の締切は3月17日です。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/kazan/J/index.html>

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/kazan/doc/2011hyousyo.pdf>

研究奨励賞には毎年複数の推薦がありますが、火山学会賞は推薦の応募がない年もありました。

火山学会を代表する賞である学会賞にも、多くの推薦をお願い致します。

日本火山学会賞は、「日本の火山学の発展に特段の貢献のあった個人または団体」が対象となり、学会員以外でもかまいません。

過去の受賞例では、個人による学問成果から自治体による火山学振興への貢献まで幅広い分野が対象となっています。

これら以外にも、教育、啓発普及活動、防災対応、個別の優れた研究、研究プロジェクトの推進など様々な分野での個人・団体の活動が対象になり得ます。

皆さまの積極的な推薦、自薦をお願い致します。

各賞選考委員会委員長

篠原宏志

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに2月23日送信しました)

○霧島山噴火緊急セッションのご案内

霧島山(新燃岳)噴火の観測・研究についての緊急セッションのご案内

日本火山学会会員の皆さま

日本火山学会 大会委員会

5月22日から開催される日本地球惑星科学連合2011年大会におきまして、今回の霧島山(新燃岳)噴火に関する研究発表の場として、緊急セッションを開催することになりました。現地観測・現地調査の結果報告、噴火モデルの提案、過去の新燃岳の活動に関するレビュー、

防災面での取り組みなど、幅広い視点からの発表を歓迎します。

なお、発表はポスター発表のみとさせていただきます。投稿を希望される方は、下記情報を

kazan-taikai@ymail.plala.or.jp

までメールにてご連絡ください。

- 1) 投稿者氏名・所属・連合大会登録ID(必須です)
- 2) 発表タイトル(仮題でかまいません)
- 3) 発表者(登壇者および共著者)氏名(確定していなくてもかまいません)

締切: 3月15日12:00(上記メールの着信の締切をもって投稿締切とします)。

上記メールで投稿希望を出された方に対し、連合大会投稿システムでの登録方法をご連絡します。3月18日~25日12時までの間で通常の投稿と同様の手法で投稿および投稿料の支払いが可能となりますので、和文英文のabstract等をご準備ください。

このとき、最初に連絡いただいた投稿者の登録IDでしか連合大会の投稿システムがアクセスできませんのでご注意ください。

なお、当セッションにおいては、なるべく多くのかたに研究発表をしていただくために、筆頭著者または発表者としての申込は1件のみに限定させていただきます。

皆さまの積極的な投稿を期待しています。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに3月1日送信しました)

○霧島山(新燃岳)噴火についての緊急セッションのご案内

日本火山学会会員の皆さま

日本火山学会 大会委員会

先にご案内しました日本地球惑星科学連合2011年大会の「霧島山(新燃岳)噴火緊急セッション」の投稿締め切りは、3月15日(火)正午です。

投稿を希望される方は、下記情報を

kazan-taikai@ymail.plala.or.jp

までメールにてご連絡ください。

- 1) 投稿者氏名・所属・連合大会登録ID(必須です)
- 2) 発表タイトル(仮題でかまいません)
- 3) 発表者(登壇者および共著者)氏名(確定していなくてもかまいません)

締切: 3月15日12:00(上記メールの着信の締切をもって投稿締切とします)。

上記メールで投稿希望を出された方に対し、連合大会投稿システムでの登録方法をご連絡します。3月18日~25日12時までの間で通常の投稿と同様の手法で投稿お

よび投稿料の支払いが可能となりますので、和文英文の
 アブストラクト等をご準備ください。

このとき、最初に連絡いただいた投稿者の登録 ID で
 しか連合大会の投稿システムがアクセスできませんので
 ご注意をお願いします。

なお、当セッションにおいては、なるべく多くのかた
 に研究発表をしていただくため
 に、筆頭著者または発表者としての申込は 1 件のみに限
 定させていただきます。

皆さまの積極的な投稿を期待しています。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 3 月 10
 日送信しました)

○日本地球惑星科学連合大会 日本火山学会火山防災委 員会 (5/23) ご案内

各位

火山防災委員会の開催について

日本地球惑星科学連合 2011 年大会期間中に、火山防
 災委員会を開催いたしますので、ご参集いただけますと
 幸いです。

日本火山学会 火山防災委員会

世話人：荒牧重雄・中村洋一・藤田英輔

日本火山学会火山防災委員会

平成 23 年 5 月 23 日 (月) 18 : 45 ~ 20 : 45

幕張メッセ 105

「2011 年霧島山新燃岳年噴火の教訓 ～火山防災への
 対応について」

1. 平成 23 (2011) 年霧島山新燃岳噴火の概要 (15 分)

気象庁火山課長 山里 平様

2. 総合討論

テーマ 1 : 火山関係者から発信する情報と自治体の対
 応について

- ・霧島市・高原町の対応について (報告：藤田・中
 村)
- ・地方自治体・マスコミが求める情報
- ・コアグループ会議の意義

テーマ 2 : 火山活動把握と研究者による危険区域の立
 ち入りについて

- ・火山活動把握 (物理観測・噴出物調査・火山ガスな
 だ) のための迅速な対応の必要性
- ・若手から見た今回の火山防災対応について (火山青
 年団の活動)
- ・火山関係者間でのルール化と地域住民への配慮など
 霧島山新燃岳噴火について、火山関係者として
- ・火山防災に貢献する情報発信ができたか?
- ・対応の仕方に問題がなかったか?

・何がよかったか? 逆に足りなかったか?

・今後の展開

などについて、scientific 以外の視点から議論する。

3. その他

最近の防災行政関連の動向について

「火山防災委員会」は委員会といっても、委員を限定し
 てそれ以外の人々を除外する会ではありません。日本火
 山学会の会員諸氏には完全にオープンな会議であります。
 ご遠慮なく、自由に会議に出席し、討論に参加して
 ください。

また、日本火山学会の会員でなくても、自由に会議に
 参加できますので、これらの話題に関心のある方にはお
 知らせください。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 5 月 17
 日送信しました)

○件名 : 学会 HP と ML の障害について

火山学会員各位

計画停電の影響で、国立情報学研究所 (NII) のサービ
 スが頻繁に停止しております。

NII の学協会情報発信サービス (wwwsoc) が停止中は
 学会 HP、ML とともに使用できません。

NII のサービス運用情報は下記 URL で確認できます。

<http://www.nii.ac.jp/content/info/>

ご迷惑と思いますが、ご理解くださるよう、お願い致
 します。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 3 月 18
 日送信しました)

○学会誌「火山」発行形態変更のお知らせ

平成 23 年 6 月 8 日

会員各位

特定非営利活動法人日本火山学会
 会長 中田節也

特定非営利活動法人日本火山学会は、学会誌「火山」
 の発行形態変更についてお知らせいたします。

2011 年度 (2011 年 4 月 1 日 ~ 2012 年 3 月 31 日) 発行
 の学会誌「火山」は、下記のとおり 2011 年 6 月発行の 56
 巻 2・3 合併号より年度間 4 回 (3 ヶ月ごと) に変更させ
 ていただくことになりました。

発行月は、6 月・9 月・12 月・(翌年) 3 月の 4 回、発
 行日は末日となります。

今後も、会員の皆さまにご満足いただけるよう、いっ
 そう努力してまいりますので、これからも
 学会誌「火山」をよろしく願います。

※6 月、9 月はそれぞれ 56 巻 2・3 合併号、56 巻 4・5

合併号となります。

- ・「火山」56巻2・3合併号…6月末日発行
- ・「火山」56巻4・5合併号…9月末日発行
- ・「火山」56巻6号…12月末日発行
- ・「火山」57巻1号…3月末日発行

※販売価格は56巻2・3合併号、4・5合併号、6号、57巻1号のいずれも

会員：1,050円、非会員：2,625円になります。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに6月8日送信しました)

○「火山」桜島火山特集号 募集〆切延長(2011年9月末日)

本年初めから、桜島火山についての特集号の締め切り延長(本年6月末日)をお知らせしていましたが、その後、霧島新燃岳噴火と東北地方太平洋沖地震が発生し、投稿予定の方々にも直接・間接に影響が出ている状況です。編集委員会と特集号編集委員において投稿準備状況について情報収集し検討した結果、再度締め切りを本年9月末日に延長することを決定いたしました。

既に投稿された方にはご理解いただきますようお願い致します。

投稿予定の方々には、必ずこの締め切りまでに投稿いただきますようお願い致します。

また、編集行程が厳しくなることが予想されますので、できるだけ早期の投稿をお願い致します。

桜島火山に関する火山特集号への論説・総説を、下記の通り募集します。

是非、ご投稿下さい。

- | | |
|--------------|---|
| 1. 特集号タイトル | Volcanic Process of Sakurajima |
| 2. 言語 | 英語 |
| 3. 出版の形式 | 別冊(予定) |
| 4. 特集号編集委員 | 井口正人(京都大学), 小林哲夫(鹿児島大学), 西村太志(東北大), 伴 雅雄(山形大) |
| 5. 投稿締め切り予定日 | 平成23年9月末日 |
| 6. 特集号発行予定日 | 平成24年12月 |
| 7. 投稿先 | 火山学会事務局(桜島特集号と明記のこと) |
| 8. そのほか | 「火山」投稿規定に従う。 |

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに6月24日送信しました)